第１７２回　番組審議会

１．日　時　　平成２０年5月１４日（水）１２：００～

２．場　所　　メトロポリタン盛岡ＮＥＷ　ＷＩＮＧ　３Ｆ「星雲　東の間」

３．委　員　　委員総数　　１３名
　　出席委員数　　９名（欠席委員数　　４名）

○出席委員（敬称略）

佐尾　玄（副委員長）
（以下５０音順）
斎藤　純
斎藤　雅博
東海林　千秋
菅原　正二
土樋　靖人
中原　祥皓
村上　幸子
吉田　浩次

○会社側出席者（７名）

内海　幸司（代表取締役社長）
佐藤　滋樹（常務取締役）
小原　忍　（常務取締役）
藤澤　利憲（常務取締役）
前田　秀男（取締役技術局長）
一戸　俊行（報道局長）
玉井　新平（報道部）

○事務局　　後藤　望

４．議　題　　『ＭＩＴスーパードキュメント　このビールに誓う』
～ベアレン再出発への歩み～
平成２０年4月２９日（火）１７：２４～１７：５４放送

５．議　事　概　要

今回は『ＭＩＴスーパードキュメント　このビールに誓う』について審議した。

各委員からは「どうしてこのような事故が起きたのか、教訓として見た」、「ヒューマンドキュメントとして見て、応援する気持ちが高まった」、「重い題材だったが、将来に希望持たせる内容だった」などの意見がでた。

６．議　事

〇事　務　局

ただいまより第１７２回番組審議会を開催いたします。

今回の議題は4月２９日に放送されました『ＭＩＴスーパードキュメント　このビールに誓』です。本日は、プロデューサーのめんこいテレビ・一戸報道局長、ディレクターのめんこいテレビ報道部・玉井新平が出席しております。

それでは、佐尾副委員長、よろしくお願いいたします。

〇佐尾副委員長

それでは、議事に入りたいと思います。初めに、一戸さんと玉井さんから、今回の番組の背景などについて説明や感想をお願いいたします。

〇一戸プロデューサー

めんこいテレビ報道部の一戸です。本日はよろしくお願いいたします。

「ＭＩＴスーパードキュメント」は、視聴者に感動を与えられるような番組を報道部から発信しようということから始まりました。今年度は３０分番組で３カ月に１回、年に４本の制作を考えております。取り上げる素材は、ニュース取材や企画の延長、検証番組、ヒューマンドキュメンタリーなど、分野にこだわらずに挑戦していきたいと考えています。今回の番組がその１回目となります。

今年の１月にベアレン醸造所でタンクが破裂するという事故が発生しました。この事故を取材していた玉井から番組化して放送したいとの要望がありました。しかし、当初から遺族

の了解が得られることと、ベアレンが会社としてきちんとした対応がない限り番組化ができないと考えていました。遺族の方からは、取材には応じてもらえませんでしたが、ご了解が得られました。ベアレンも真剣にその再発防止に取り組んでいたことなどから、営業再開となった３月下旬に最終的なゴーサインを出しました。

ディレクターを担当した玉井は、アナウンサー、そして県警の記者を兼務しております。５年目で初めて番組をつくることになりました。カメラと編集を担当した金和則も初めての経験でした。

プロデューサーの私としては佐々木陽一さんがつくったビールを全員で飲むシーンが番組の全てだと考え、そこに収れんするようにしたつもりです。

今日はいろいろな意見を伺い、次の番組作りに生かしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

〇玉井ディレクター

報道部で記者兼アナウンサーをしております玉井新平と申します。今日はよろしくお願いします。

私がベアレンを最初に取材したのは、事故直後の会社側の会見でした。食品偽装が相次いだこともあり、一企業が不祥事を起こした際にどのように説明責任を果たすかという企業倫理がこれまでになく注目されていました。会見で木村社長は安全装置を付けていなかったことを明らかにし、謝罪しました。そして、会見を切り上げることなく、記者の質問が途絶えるまで真摯に対応しました。「仲間の死を償う」という覚悟を感じる会見でもあり、その姿を見て、この企業の営業再開までの道のり追ってみたいと思い企画提案しました。

しかし、ベアレンの再開に対してご遺族の前向きな気持ちがないとこの番組は作れないと思い何度も西和賀のご遺族の家に通いました。ようやく語ってくれた言葉、それが「夫の生きた証を子どもに残して欲しい」というものでした。これが番組の一つの核になると思いました。余談ですが、その後、奥様と子どもたちがめんこいテレビに遊びにきてくれました。その時、奥様から「お父さんがテレビに出ている」と子どもたちが喜んでいたこと、当初は取材の協力に反対していた陽一さんの両親が感謝していたことを教えてもらいました。

陽一さんの思い、ご遺族の思いがベアレンの社員に引き継がれる。「ビール」が人の思いを乗せたメッセージになっている、それが伝われば良いなと編集をしていて思いました。

初めてのドキュメンタリーですので、未熟な部分が多々あると思います。忌憚のないご意

見をよろしくお願いします。

○佐尾副委員長

　どうもありがとうございました。それでは、委員の方からご意見を伺いたいと思います。まず初めに、土樋委員、お願いいたします。

○土樋委員

　事故の痛手を受けた企業が立ち直って営業を再開するというストーリーは、よくあることで、定番と言ってはちょっと言い過ぎかもしれませんが、創業当初の仲間を失ったという事実の重さで、番組には引きつけられました。

　あの事故が起こったにもかかわらず、就職を希望していた岩手大学の女子学生が、それでもなおこの会社に就職したいという気持ちがあの番組の中で一つの希望として心を打たれました。

　私もこの事故の取材をしましたので、玉井君と同じ気持ちの部分が非常に多くて、３０分が短く感じられました。

○佐尾副委員長

　ありがとうございました。それでは、斎藤純委員、お願いいたします。

○斎藤純委員

　先月のバレーボールの番組も泣きましたけれども、また別の意味で今回は泣きました。難しいテーマのものをよくこれだけまとめたなと、感心して見ました。取材を始めたときには着地点は見えていないわけです。だから、番組としてまとまるかどうか分からない状態で始まったと思います。僕はベアレンの社長も専務もちょっとつき合いがあります。非常に真面目な良い連中で応援はしていました。再開までよく密着して取材をしていたと思いました。無理に言葉を引き出そうとしていないその距離のとり方、玉井さんの取材姿勢がすごくいいなと思いました。

　それから、材木町の「よ市」の場面で僕もうろちょろしていますけれども、あのときにいた人たちは再開をすごく喜んでいるんです。その喜びを、人一人亡くなっているわけだから表に出せないという、そういうトーンがこの番組全体に流れていました。僕のようにベアレ

ンを応援している者の一人としては、実にいい番組を作ってくれて、ありがたい番組だったなと思いました。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、菅原委員、お願いいたします。

○菅原委員

これは、めんこいテレビにしては軽からぬ、非常に重い番組じゃないかと、失礼を承知で申します。のっけから事故で一人が亡くなっているところからスタートしています。皆さんのコメントも誠心誠意で素晴らしく、それの連続がずっと続きます。そうすると、見ているほうの気持ちがいつまでたっても何か明るくなれないというか、どこか重いものがあったような気がします。事故の原因は簡単に１行のナレーションで、「ドイツの古い釜をそのまま仕入れたこと」とのことでした。後に再開するとき圧力の調整を２段階につけて、足も強化したと言うけども、それは当然最初からやるべきことです。発酵食品を入れるタンクというものは爆発するのは当たり前です。もしもドイツで使った古いビールのタンクをそのまま使ったとすると、当然起こり得るべくして起こったような事故とも見えるわけです。足元を固めていないというのもおかしい。家庭用の石油缶だってがっちり固めています。ですから、最初にそこまでやっておけば未然に防げたような気がします。

それから、再開に当たって、仕込んだビールを「これが佐々木君の味だ」と言っていましたが、２カ月も操業停止をすると、再開した場合に量的にカバーし切れるかどうかという問題が何か引っかかります。その場合に、チーフブレンダーのような佐々木さんのやっていたことを継ぐ人がいるのかどうか。再開するからにはもっとこうしなきゃいけないというふうなプロセスが必要だったと思います。簡単に出来たふうに見えるのは疑問です。もしも再開して続けるのなら、綿密に味を吟味するシーンが欲しいような気がします。味ということに関して佐々木さんだったらどうしただろうとかのディスカッションをする場面があったほうが良かったと思います。そうすれば、いきなりあるもので間に合わせたという印象がつきまとわなかったような気がします。２ヵ月の操業停止で再開、逆に言うとこの乗りでは先が危ないんじゃないかという印象も多少はつきまとうのです。

明るくもなっていない、でも乗り越えて頑張ろうというのも分かります。けれども、本当に乗り越えたのかどうか。うちの近所にも地ビール会社がありますが、この業界は大変厳し

いのです。ですから、この番組の終わり方でも、ぱっとくす玉が割れたような喜びは感じないのです。私は、皆さんそれぞれ頑張ってください、そういう教訓として解釈しようかなと思っています。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、斎藤雅博委員、お願いいたします。

○斎藤雅博委員

ベアレンのタンク破裂事故とか、製造再開というのはニュースで知りました。事故から再開までのメンバーの心境とか再出発への思いなどがよく描かれていたと思いました。

菅原委員さんから事故そのものについての話がありましたが、私はヒューマンドキュメントとして見ました。事故の真相追求のドキュメントだったら違う展開だったと思います。

亡くなった佐々木さんが創業メンバーということで、残された人々の悲しみや苦悩はいかばかりかと思い見ていたのでが、ビールに込められた仲間への誓いということで、再出発できて本当に良かったと素直に思いました。もちろん経営者として安全管理の責任はあるわけで、それは厳しく問わなければいけないと思いますが、番組上ではきちんと安全対策取っていたようです。佐々木さんの思い、残された家族の思い、それから全国からのファンの励ましもあったということで、残されたメンバーの意識が高まっていったのではないかなと感じました。

社長の木村さんの「私の夢につき合わせたばっかりに」とか「ビールを頑張って作り続けたと報告したい」という言葉はすごく重みがあったと思います。

やっぱり最後にみんなでビールを飲むシーンというのは、恐らく皆さん万感込み上げてきたんじゃないかと見ておりました。

もう一つ、喜ばしかったのは、新入社員の方がベアレンの味を受け継ぐ仲間に入ったというのは、希望の星のように感じることができました。

ついでに言いますと、地産地消ということでこのような製品があるわけですので、我々も広めていきたいと思います。ベアレンのような、小さいけども、誠実な会社は我々としても応援していくべきではないかと思った次第です。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、中原委員、お願いいたします。

○中原委員

重い題材だったけれども、最後には将来に希望を持たせる手法でよくまとめたと思います。見る方によって受けとめ方は当然違うと思います。私はヒューマンドラマと教訓、その両方を受けとめて見ていました。特に岩手大学の女性が入社をだめだと言われて、しばらく番組に出てこなかったもので、気にしながら見ていました。最後に「よ市」の場面で出てきて、入社したことが分かり、これから大いに頑張ってほしい、と応援の気持ちでいっぱいとなりました。

それから、この事故は非常に印象深かったということで、記憶がある人が多かった。そういう意味で、ベアレンというタイトル出た時に関心を持って見る人が多かったのではないかと思います。３ヵ月に１回の番組ということで、視聴者が知っていることを、このようにまとめて出てくると、また違った印象深いものがあります。したがって、次はどういうテーマで制作するのかということに非常に関心を持ちました。

それから、今は食に限らず安全、安心という面が非常に厳しく求められています。その思いがこの番組にあるとすれば、もう少しそこを突いてもよかったのではないかと思います。社長が自分の口で「安全装置つけていなかった」と言ったとすると、その責任がどこにあるのか、再開を喜ぶだけでいいのかという思いにさせられます。人の命を奪ったということで、気になるところでした。

今年もそれぞれのメディアで１０大ニュースをやると思います。ベアレンの事故は年明け早々ということで非常に心に残るものでした。めんこいテレビがこういう番組で取り上げたということも、関心もまた深まったのではないかと思います。

それから最後に、一戸さんが全員で飲むビールがハイライトだとおっしゃっていましたが、この事故については、近隣の人たちも非常に関心を持っていました。そういう意味で、地域の応援とか地域との関わりということで、周囲の人たちをもっと引っ張り出しても良かったと思いました。最後に前庭で集まり何かやっていました。そこの盛り上がりをさらりとやるのも手法でしょうけれども、何か一工夫欲しいなと見ておりました。どっちにしても、この重い題材をよくまとめた良い番組だった思っております。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、村上委員、お願いいたします。

○村上委員

ベアレンビールは７年前に創業した時点で取材させていただいています。地ビールは味にばらつきがあったり、癖があったりして、なかなか浸透しづらい部分があるのですが、その点ベアレンビールは、味に対して非常に真摯に取り組んでいて、どんどん水準を上げていったということは地元の人がむしろ知っています。私も個人的に、あれば必ず頼んでいましたし、応援をしていました。そういった地元の人たちに愛されていたビール工場で起きた１月２２日の事故は非常に衝撃的でした。記憶がまだ本当に生々しいと思います。

そこで、営業再開とかの記者会見で社長、専務が真摯に答えていらっしゃる姿というのも非常に印象に残っています。そこを取り上げてテーマにしたこの番組というのはタイムリーだったし、テーマとしても非常にすばらしいなと思って見ていました。

ドキュメンタリーですから、客観的な報道部らしい捉え方をしているとは思うのですが、そこには再生という大きなドラマがあるわけです。それを余り感情的に表現しても非常に偏ったものになるでしょうし、かといって番組として成立させるためには起伏も必要でしょう。その辺の加減がすごく難しかったと思います。

玉井さんのナレーションは非常に抑制されていながら、でも棒読みのようにならずに、ちょっと失礼ですけれども、何か大人になったかなという印象を受けました。

私は個人的な思いもあり、うるうると来てしまった部分もありましたが、視聴者の方々もベアレンの今後を本当に気にしていたと思います。ビアガーデンも再開し、あと「よ市」でも再開し、そういったところでまた応援していこうという気持ちが、視聴者、地元の人たちの間で高まってくるようなメッセージも十分に伝わってきました。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、東海林委員、お願いいたします。

○東海林委員

ベアレンですが、私が担任している男子学生が、１月１９日に面接試験を受けさせていただきました。その３日後にあの事故がありました。ニュースを見て、正直言ってベアレンは

もうだめかもしれないなと思いました。それから１週間後ですが、ベアレンさんから「すべてを見直しますので一旦今回の面接試験は白紙に戻させてください」という非常に真心が伝わるお手紙をいただき、逆にこちらが恐縮してしまうような誠意を感じました。

私は材木町に住んでおりますけれども、ベアレンさんは「よ市」には３年前から出店してくださって今年は４年目の春を迎える予定でした。お客様も多くついてきたところで、多くの方々から今年の「よ市」にベアレンさんは間に合うのかなという問い合わせがあったということを振興組合の方からも聞いております。「よ市」で、ベアレンの社員の方たちの一生懸命さを私たちはじかに感じて知っていた中での事故だったので、みんなが心待ちにしていた再開でした。

私は、今までベアレンを知らなかった人も、今回の番組を見たならば応援したいという気持ちになった方がすごく多かったのではないかなと思います。私は今回このような番組を作ってくださって本当にありがとうと心から思いました。玉井さん、いい番組でした。ありがとうございます。

〇佐尾副委員長

どうもありがとうございました。それでは、吉田委員、お願いいたします。

〇吉田委員

この番組の一番の見せどころは、事故で尊い命を失ったということで企業が危機存亡の時期を迎え、ここからどう立ち上がるかというドキュメント性です。狙い通りにその思いが番組の中に描かれていたと思います。

それから、ベアレンというのに対して全くご存じのない方もいらっしゃいます。そういう意味では、もう少しベアレンの紹介、それからベアレンという地ビールの製造とか、ドイツからの指導があったとのこだわりの部分の紹介とか、そんなことをぜひやってほしかったなと思いました。関心のある方はそれなりの見方をしたと思いますけど、そういった紹介も番組には必要ではなかったのかと思いました。

全体的にはどうしても暗くならざるを得なかったわけですけども、ビールに対する思いとか、誓いというのがありましただけに、もっと後半ではポジティブというか、明るい部分も少し組み入れても良かったのではないかと思いました。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。

それでは、欠席委員のリポートを事務局からお願いいたします。

○事　務　局

久慈委員、役重委員からお預かりしております。

○久慈浩介委員リポート

私も同じ醸造関係の仕事なので、この事故については心が痛みました。そんな中で遺族の了解をいただき、このような再起の番組を制作していただいたことに感謝します。

ベアレンビール側に決定的な過失があったわけではないのでしょうが、どうしてこのような事故が起きたのか、それを世間に発表し、今後はどうしていくのかを伝えるためには、このような番組はとても良かったと感じています。同業者の私でさえ、ベアレンを応援したくなりました。事実をありのまま伝えることの大事さを感じた番組でした。

でも、私の蔵はこのような番組を作っていただかなくてもいいように、改めて安全管理の大事さを自分に言い聞かせた番組でした。

○役重真喜子委員リポート

一番強く感じたことは、申し訳ないのですが「表面的に終わっている」あるいは「掘り下げ方がいまいち」というものでした。あらかじめ言い訳しますと、これは決して制作スタッフの努力不足を言いたいのではなく、このようなドキュメントを作る際にマスメディアとして宿命的につきまとう難しさがあったのかな、という感想です。

「表面的」というのは、何と言うか、あまりにセオリーに準じているかなという、つまり事故を起こした、反省した、努力した、再建に向かう、というストーリーがあまりに滞りなく美しく流れていってしまう。あれだけの大きな事件、苦しみ、悩みの中で、社長以下、もっとドロドロの思いや葛藤があったはず。「何でまじめにやってきたのに俺たちだけがこんな目に遭うのか」「他社だって結構いい加減なところもあるのに」「マスコミも業界も手のひらを返したように糾弾しやがって」そんな人間的な本音の部分もあって当然。もうやめたいという弱音もあったでしょう。仲間内のすれ違いや裏切りもあったかも知れません。そういったものが、カメラには捕らえられなかった。

それはなぜだったか。それは今回の事案に対する「テレビ屋」としての微妙な立場が影響したのではないかと推測するのです。事件が起きた瞬間から、めんこいテレビは事件の原因と責任を追及するメディアとして彼らを取材し、記者会見で謝罪を受け、さらにマイクを向けるという当然の役割を担ってきたでしょう。その検証者としての立場と、今回の番組作りの中で社員の心に寄り添い、人間の弱さをありのままに見つめ、本音を吐き出させるというドキュメント制作者としての立場は、互いに相容れにくいものがあったのではないでしょうか。

画面に登場するベアレンの社員たちの表情から、最後まで固さが取れなかったのはそのせいかと思われました。カメラに対する警戒心、無意識かも知れませんがそういうものが感じられました。本当であれば、数年たって関係者の痛みも和らいだ頃であれば、より本音をみせられたかも知れませんが、それでは再建支援という今回の番組の一つの目的が果たされないですものね。

色々申し上げましたが、結論としては限界、制約のある中で取材者は丁寧に時間をかけ、よく作られたと思います。ベアレンビールの注文先が分かれば飲んでみたいです。とてもおいしそうでした。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。労働災害で死亡事故というのは相当重く、悲惨です。家から「行ってまいります」と仕事に行ったのがもう帰ってこない。これが一番の悲惨さだったと思います。相当工夫されて作られた番組ですが、私は第三者の、例えば基準監督署の評価とか、ジャッジがどうだったのか、その辺を前半に入れて、企業の責任というのを明確にして、再発防止対策を明示してから番組を進めていったら良かったのではないかと考えました。重大ニュースでもなかなか１０大ニュースにならないということを去年の暮れにお話ししましたが、年に４回番組を制作するということですので、さらに良い番組を作っていただきたいと思っております。

それでは、これで番組審議会を終了いたします。本日はありがとうございました。

○事　務　局

今回の審議会の模様は、５月２４日（土）朝４時４２分から「めんこいテレビ番審リポート」として放送いたします。次回は、６月４日（水）を予定しております。